

---

# 魔王様の召使の君 番外編 / 輪郭のにじんだ夢

刑部 科

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王様の召使の君 番外編 / 輪郭のにじんだ夢

### 【Nコード】

N5954Y

### 【作者名】

刑部 科

### 【あらすじ】

巷では色っぽくて高慢で気位の高い美女と名高いナガネキナギは本当は泣き虫、弱虫で寂しがりやだった。

そんな彼女と、意地悪なとある少年の話。魔王様の召使の君番外。全三話。非コメディ、非シリアス？

# 1. 「ねえ、あと少しだけ」

「ねえ、本当に君魔物なの？」

少年がくすくすと笑っていた。いかにも楽しげに。

「そ、そうです」

「そんなに泣き虫なのにおかしいね」

少年はナギの髪を指先でつまみあげると、力を余り込めずに引く張った。

「やめて下さい」

ふるふると力なく首を振って抵抗の意思を示しても、そんなことなど彼を抑止する力には繋がらないのだった。

ますますと笑みを深めると、少年はつまみあげた髪の毛の先を自分の指に器用に巻きつけて遊びだす。

「やめて下さい？……本当におかしいね。君は魔物なんだろう？そんな風にお願いなんでしないで、僕の手から勝手に奪い返せばいいじゃないか。ほら、簡単なことだろう？」

ねえ？ と楽しそうな光を目に浮かべて、少年は言った。

ナギがそんなことできないことを分かっていて、その上での言葉だった。

「巷で君のことをなんとなく言っているかを聞いたよ。色っぽくて高慢で気位の高い美女ナガネキ様      なんだってね？……ねえ、どこが？」

教えて、と少年は耳元で囁く。

「どこがって……」

「噂って当てにならないね」

少年はナギの髪をぱつと手放すと、床に座りこんで泣いているナギの顎を指先でくいと持ち上げた。

「君は弱虫で、泣き虫で、寂しがりやだ。特別な力なんてもっていない、只の脆弱な人間である僕の手をふりほどくことすらできない」

そうして、彼はナギの額にそつと口付けを落とした。  
彼女は抗わず、素直にそれを受けるだけだった。

少年      パック・ノランは脆弱な人間でありながら、ナギの  
上位に立っているのだった。

魔界において、少年はナギの愛玩物という位置づけであり、ナギ  
は彼の主人という立場であつたが、真実はその逆だ。

初めて出会つたときから、もうナギは彼の虜だった。  
どうしてだろう？

確かに彼は脆弱な人間で、彼女は彼など一呼吸する間に屠ること  
も叶う力ある魔物だというのに。

彼の眼差しにさらされているだけで、彼女は呼吸すら儘ならない  
ほどだ。

思考が止まりそうになる。自分の手足も思い通りにならない。

『色っぽくて高慢で気位の高い』演技も板につき、素を隠すこと  
など造作なかつたはずの自分はどこにいったのだろう？

魔物としてふさわしくなろうと虚勢を張つて演技していたが、そ  
れは上手くいつていると思つていたし、彼が現れるまではこれから  
も巷のイメージする『ナガネキ様像』は維持できると信じていた。

色っぽくて高慢で気位の高い美女ナガネキ様      世間での彼  
女イメージはまさしくそれで、彼女もそのイメージを損なわぬよう  
注意深く振舞つていたのだ。中身は全く真逆であつたにもかかわら  
ず。

彼女は影で泣くことはあつても、人前で泣くことは無かつた。

『魔物らしくないから』。

それなのに、彼の前では全てを曝け出してしまつことを止められ  
ない。

出会いがいけなかったのだろうか？

彼と初めて出会ったとき、彼女はやはり泣いていた。

パックは脆弱な人間な癖に、魔物である彼女に近づき、なだめるように背中を撫でてくれた。

「女の人が泣いていたら、慰めるものだろう？」

そんな風にいつて。

後から、「好きな女の子なら慰めるより泣かせたくなるけどね」とも言っていたけれど。

彼の方が彼女より余程魔物らしいのではないかとナギは思う。

ナギのような心の弱い者が魔物であること自体が間違いなのかもしれない。

「可愛い可愛い泣き虫の”ご主人様”？ さて、今日はどんな風に遊ぶ？」

とつてつけたようなご主人様、の響きが憎らしい。

それなのに、少年の声で心が震えてしまうのを止められない。

「返事がないと勝手に決めてしまうよ？ ねえ、あと少しだけ待ってあげるから、言いたいことがあるなら何か言ってご覧？ いえないの？」

口を挟む隙を与えてくれないくせに、そんなことを言う。

ナギが口を開こうとすると、彼は彼女が何か言葉を口にする前に、「時間切れだ」

そういつて笑った。

「……そうだね。君が持っている装飾品の中に、力を封じるアイテムがあった気がするな。あれをつけたらどうだい？ それで鬼ごっこしようか。そうでなければ僕に勝ち目が全くないからね。もし、君が時間内に僕に捕まらなかったら君の勝ち。僕に叶えられる範囲の願いなら、一つ叶えてあげる。代わりに、君が時間内に捕まえら

れてしまったら、君は僕の願い事を一つ聞く。簡単だろう？」

返事は？ と問われてナギはすかさず頷いた。

余り時間を置けば、今度は彼が何を言い出すのかわからない。

「いい子だね、ナギは。じゃあ、今から君の力を封じるアイテムを探しにいくか。勿論、君がどこかの馬鹿な魔物に狙われるのは嫌だから、危なくなったら外してもいいけれど、もし外したら鬼ごっこはその時点で君の負けだよ？ いいね」

「はい」

「じゃあ、行こうか」

につこりと極上の笑みを浮かべて、パックはナギに手を差し出した。

そつと手を重ねれば、パックはぐいと手を引いてナギが立ち上がるのを手伝ってくれた。

二人並ぶと、わずかに彼のほうがナギよりも身長が低いのがわかる。

当然だ。人間である彼は、彼女の何分の1も生きていない。

彼女にとっては瞬きするほどわずかな、10年と少ししか彼は生まれてから今まで過ごしていないのだ。

「鬼ごっこが終わったらおやつにしようね。昨日仕込んでおいたクッキーの種があるよ。あれを焼いてあげる。君のために」

だから鬼ごっこに負けても泣いちゃダメだよ、とパックはナギの頭を優しくなでた。

彼は自分が負けることをちらりとも考えていないようだった

そして、その予想は間違っていないだろうとナギも思った。

## 2・「ねえ、もう見てくれないの」

暗闇の中、女性の悲鳴が響き渡った。

恐怖に引きつった顔。見開かれた目。

必死で逃げ惑う彼女は嫌な汗でびっしょりだ。

何かがぬちゃりと嫌な音を立てて、彼女に襲い掛かり

「いやあああああああああ！！！！！！」

「そんなに脅えないでよ、作り物如きに」

パチンと音を立てて、パックは小さな箱の扉を閉じた。

するとナギに悲鳴を上げさせる原因となった幻影も同時に消えた。  
腐れた肉と成り果てた、彷徨える死体が女性を襲う恐怖映像

そんな恐ろしい幻影を閉じ込めたアイテムが最近、この魔界で流行り始めているらしい。パックはどんな手段でかそのアイテムを手に入れたようだった。そして何も知らないナギに披露して見せたのだ。

「ナギ、面白いものを手に入れたんだ。君に見せたくてもってきたんだよ。一緒に見よう」  
そういつて。

一見して小さくて可愛らしい宝石箱のようだった。

それを差し出すパックの笑顔もまたすばらしかったので、ナギは夢見心地のまま頷いたのだ。

そして、すぐに後悔した。

「また泣いてる。目が真っ赤だよ、ナギ」

涙で濡れた頬をパックの指先がぬぐう。

透明な雫が彼の指先で弾かれ、宙で碎けた。

「魔物もヘンなことをするものだね。君たちの中には余程こんな作り物よりも奇怪な姿をしているものもいるというのに。……それとも作り物だからこそ怖いのかな。どうなの、ナギ？」

いまだ涙を止められず、震えるナギには答えることが出来ない。黙って首を横に振るだけだ。

「わからないの？ ふうん」

彼はつまらなそうに唇を閉じると、蓋を閉じた宝石箱のようなアイテムをお手玉のように何度か宙に放り投げた。

ナギはその度にまたあの恐ろしいモノが見えないかどうか不安で仕方がない。

俯いて、ぎゅっとパツクの服の裾を握った。

何かに縋りたくて仕方がない。そうでなければ自分を見失いそうだった。

「怖いのか？」

聞かれてナギはすかさず頷いた。

「本当に君は弱虫なんだね」

おかしいの、と彼は本当におかしそうに笑った。

「でも、どんなに怖くても僕の服は何も君を助けてくれないよ？」

そう言つて、パツクはナギの手を自分の服から引き離れた。

「あ……」

「ねえ、こっち見てよ」

彼女はまだ引き離された彼の服を見ていた。

まだ顔を上げるのが怖かった。

彼の笑いを含んだ声に何かを感じる。

また、あの怖いものを見せられるのではないかな  
そういう不安が湧き上がってくる。

「何もしないよ。信じてくれないの？」

「いえ、そんな」

「だったらこっち見てよ。ねえ、もう見てくれないの？」



悲しそうな響きでそう言われてしまつてはナギも顔を上げざるを得ない。

恐る恐ると顔を上げると、ナギの頬に彼の手がかけられた。

そのまま頬と、耳たぶ、首筋をそつと撫でられる。

甘い疼きがナギの身の内を走つた。

彼の手が優しく彼女の肌をなぞるたび、彼女はいつも甘く切ない感覚に陥るのだ。

「見た目は君の方がお姉さんなのにね。泣き顔は本当に可愛いよ、ナギ」

パックがうつとりとした声で、ナギの耳元で囁く。

それはナギにとつては大変不本意なことなのに、彼に可愛いといつてもらえるならいいという気になつてしまう。

「君が可愛く泣くから、ついつい泣かせちゃうんだ、ごめんね？」  
謝罪になつていないそんな言葉で謝られてしまうから、彼女は彼に何度泣かされても怒ることができないのだった。

\*\*\*

何度も背をさすられて、ナギが漸く落ち着いたのを見計らつて少年は口を開いた。

「でも、魔物でも怖いものがあるんだね。世の中では僕は女性に怖いものはないんじゃないかと思つていたよ」

パックは何かを思い出すような表情を浮かべている。

彼にそう思わせる何かが、過去にあつたのだろうか。

でも、女性？

「あれ、何か不機嫌になってる？」

「別に、なんでもないです」

「もしかして妬いてるの？やだな、ナギ」

「別に。人間なんかに妬いてなんて……」

「ナギは本当に面白いね。魔物は余り独占欲はないのかと思ってたよ。ほら、魔物の中には不特定多数の相手と付き合うような者も結構多いと聞くからさ。……そうでもないのかな？　そういえば、魔王様の側近はご執心の相手がいるんだってね。この間、誰かがそのせいで消されたと聞いたよ」

「先日。シィータクエという者が……」

「ああ、そんな名前なのか。流石に僕みたいな只の人間に詳しい情報回ってこないからね」

その割りに、彼はいろいろなことを知っているし、今回みたいなアイテムをどこからか手に入れてくることもある。本当に不思議だ。「一度見て見たいね、魔王様の側近にそうまでさせる女性を。人間と聞いたけど」

「……」

「綺麗な顔が台無しになってるよ、ナギ。心配しないで。別に純粹なる好奇心だから」

「……」

「おや、へそを曲げてしまったかな。それじゃ一つ教えてあげる。さっき僕が思い出していたのはね、僕の姉のことなんだ」

「お姉さん……？」

「そう。怖いもの知らずというか、すさまじく全てに対して鈍感というか、思考が少し人とずれているというか……とにかく、僕にはよくわからないところのある姉だね。人間の女性の大半は黒くてテラテラしたゴミに集る虫を嫌っていることが多かったのだけど、うちの姉はしげしげと観察しているくらい余裕があったりしたし。怖いものがあるのかすらわからなかったな。そういえば、僕がここにくる少し前にいなくなっていた気がするけど、どこいっちゃったん

だろうな」

「消えた……？」

「うん。そんな気がするだけだけど。何しろ、僕の家は貧乏子沢山を地でいく家だから、一人二人いなくなってもなかなか気付かないのさ」

人間は魔族などより血族の絆を尊いものと考えていると思っただのだが、違ったのだろうか。

それとも、彼の家は特殊なのだろうか。

「うん？ 珍しいと思ってる？ 別にそうでもないと思うけど……まあ、うちに細かいことを考える人間が少ないせいもあるかもね。それに、一人二人消えたくらいで心配するにはうちの家族は多すぎる。そうでなければ、君についてなんてきてないよ、ナギ」

彼を魔界につれてきたのはナギだ。

彼は抵抗もせずに従った。人間界からこちらに来るのはたやすいが、魔界から人間界に戻るのは魔族ならともかく、人間には酷く難しい。

二度と戻れないかもしれないのに、彼はそれを説明しても「いいよ」と二つ返事で彼女についてきたのだ。

「もしかしたら、この魔界にいるかもしれないね。僕の姉も女なら、きっと魔王様でも怖いと思わないんじゃないのかな」

彼は首を傾げてそういった。

「そんな人間いる筈がありません」

そんな人間は、きっと魔王様に現在付き従う只一人の召使くらいだろう。そういえば、彼女があゝ魔王様の側近の思い人だったか。

「まあね。あくまで仮の話だよ。実際、うちの姉もまさか魔界になんてきていないだろうしね。僕と姉がこの魔界に一緒にいるなんて偶然、そうそうあるものじゃないだろうし。あまつさえ、彼女が魔王様に会う確率なんてそれこそもっと低い低い可能性だろ？」

「ええ」

「だから、想像の世界のお話だよ。もしそうだったら面白いねって  
いうあくまで妄想さ」

まさかそれが現実に起きていることだとは知らず、パツクが「あ  
りえない話だけれどね」と、一言で切り捨ててその話はお仕舞い  
になった。

彼の魔王様の唯一の召使の名前はキミィ＝ノランという。

紛れもなく、少年の姉の名前だったが、幸か不幸か魔王様の召使  
のことは有名でも、その名前を知るものは殆ど誰もいなかった故に、  
パツクもナギもその事実には気付くことはなかった。

### 3・「もし、またここで会えたら」

「そういえば、家族はいないの？」

ふと思いついたという風情でパックがナギを顧みた。

「私の？」

ここにはナギとパックの二人しかない。

だから、話の流れでいえば多分パックの言っているのはナギのことなのだろう。

「うん。ここに来て暫く経つけど、ここで君以外にあうことは殆どないし。そもそも、魔物の生態系がよくわからないからどうなっているんだろうと、不思議に思ってたんだ」

確かに、パックを魔界につれて来てから数日どころでない程の間が流れていた。

その割りに、ナギが彼について知っていることが少ないと気付く。彼について知っているのはナギの誘いに応えてこちらに来てくれたこと。

どうやらナギを気に入ってくれているらしいこと。

それから、年は10と少しで、人間の中でも子供とっていい年齢だということ。

ナギを泣かせるのが好きで、でも笑顔も好きらしいこと。ナギに意地悪なこと。

それに加えて、彼に少し風変わりな姉がいることを最近知った。その程度だ。

逆もいえる。ナギについてパックから何か聞かれたことも殆どなかった。

これが殆ど始めてのことといってもいい。

「勿論答えたくなければ答えなくていいよ」

ナギが悩んでいると思ったのか、パックは急いでそう付け加えた。パックは意地悪だが、ナギを本気で傷つけるようなことはしないように気をつけているようだ。

その心遣いが嬉しいと思う。

でも素直にそういえば、パックはひねた答えを返して認めないだろう。

代わりにナギはパックの「答えたくないなら……」という言葉を否定するように首を振った。

「別に答えたくないわけではないです。何を説明しようか迷っただけで」

「……そう？」

「ええ。質問の答えですが、私は自然発生タイプの魔族なので、家族はいません」

「自然発生タイプ？」

「ええ、魔族には二種類いるんです」

「へえ、そうなんだ」

「ええ。自然発生タイプと、血族のいるタイプの魔族の二種類がいるんです。私のような自然発生タイプは係累をもたず、ある日突然どこかに生まれます。親も兄弟ももちません。但し、私が子を生めば、子供は自然発生タイプではなく、血族のいる魔族となります」  
そう説明すると、パックは感心したようにため息をついた。

普段、情け無いところばかり見せているから、彼に感心させることが出来ると少し嬉しい。

「君みたいな自然発生タイプはよくいるものなの？」

「割合から言うと、血族のいるタイプよりは当然少ないです。ただ、自然発生タイプの魔族のほうが、力の強いものが多いので、上級魔族の中で言うと、自然発生タイプの方が多くでしょうが」

上級魔族というのは、力の強い魔族の中でも特に認められたものだ。

ナギもその中のひとり。

自然発生タイプの頂点が魔王様だった。そして、その側近であるトリフェ様が血族のいるタイプの魔族の頂点といえる。

「そうなんだね」

パックはナギの説明に満足した体で、ひとしきり頷いた。

「あの、他に何か気になることはありますか？」

彼が知りたいというのなら、できるだけ教えてあげたいという気持ちになった。

こんな風に満足そうな笑顔をしてくれるなら、なんだって。

「気になること？ いっぱいあるけど……」

「いっぱいですか？」

「うん、ナギについてね。一杯知りたいよ。でも一杯知るには、一杯時間が必要だね」

そういつてパックが悪戯っぽく笑った。

彼の言葉にナギは頬を赤らめた。

嬉しい、それから恥ずかしい。

「例えば、なんで君の顔は今赤いのかなんてことか」

\*\*\*

「ご家族に会いたいと思うことはあるんですか？」

パックに頭を撫でられながら、ふと思いついたことをナギは彼にたずねてみることにした。

こうしているとどちらが年上で、どちらが年下かわからない態度だが、純粹に生きてきた時間は明らかにナギのほうが長いに決まっているし、外見もナギのほうがお姉さんに見える。

けれども、考えてみれば彼はまだまだ幼いといっている年齢だ。幼い彼が、家族と離れているのはとても辛いことではないのだろ

うか？

家族が生まれた時からいないナギには想像してみることしか出来ない。

もし会いたいといっても、たやすく願いをかなえてあげることができないけれど、それでも気になった。

ナギが彼を魔界につれてくることなどなければ、彼は今でも家族と共に暮らしていたはずだ。

「寂しく無いといったら嘘にはなるけど。どうせあのままではいられなかったからね」

「どうせ？」

「いったらう？ 僕の家は貧乏子沢山だったって。食い扶持が増えれば増えるほど、生活は苦しくなるもんだ。きつと、あそこに残っていたとしても、遠からず僕は家を出たよ。仕事を探しにいかねばならなかっただろうね」

だから、ナギが気に病む必要は無いよ。

そう言っただけは優しく笑った。

「ああ、不安そうな顔して。本当に、君は僕より長く生きてるの？ 実は僕の方が大人なんじゃないかと思ってしまっよ」

ナギの身体を包むように、彼は後ろからそっと抱きしめてくれた。じんわりと背中が温かい。

「僕は幸運なんだよ。君がここにきてくれたから。働きにわざわざ出る必要もなくなった。その上、好きな子が傍にいてくれるんだよ？ 不満をいっただけ罰が当たるね」

「そう、ですか……？」

「うん、そうさ」

パックはためらう様子も見せずに肯定して見せた。

「でも、会いたい？」

「まあ、会えたら嬉しいけど。僕には今ナギがいるからね」

「では、もしここでまたご家族に会えたら？」



「え？もしここで会えたら？」

彼には思いもよらぬことだったらしい。

パックが軽く目を瞠った。そしてそれからにやりと笑った。

「決まってるだろ、逃げ出すよ」

どうしてですか、とナギが尋ねる前にパックは笑みを深くしてこ  
ういった。

「ナギみたいな美人とどこで知り合ったのかなんて馴れ初めを聞き  
出そうとするに決まっているから。そんなもったいないことできな  
いさ」

ナギはあつけにとられたように口をぽかんと開けた。

上気する頬を押さえる。

そして、どうしたらこんな子供が出来るのか、彼の家族に一度会  
ってみたいと思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5954y/>

---

魔王様の召使の君 番外編 / 輪郭のにじんだ夢

2011年11月20日03時17分発行